

未来学と歴史学

古明地 秀行

はじめに

歴史学ないし歴史という言葉が古くからのなじみ深い言葉であるのに対して未来学という言葉はごく最近になって用いられるようになった、きわめて耳新しい言葉である。日本に「日本未来学会」という学術団体ができてからもほんの十年と少々しか経っていない。そのため未来学といってもその輪郭もまだ十分には整っていない。いわゆる未来学の範疇に入るのであるうと思われる名称をもつ団体の数も多い。それぞれの団体がそれぞれの方法で独自に研究を進めている。海外においてもしかりであり、著名な団体の一つにはローマクラブがある。

このように、未来学という言葉が新しく生まれてきたものの、その言葉の内容そのものはまだ雲をつかむような状態である。未来研究の対象を何にするか。時間をどこに設定するか（近未来か、それとも遠未来か）。何を拠所として未来を考えるか。などによって、さまざまな未来観が生まれてくることになる。未来学関係の研究発表の内容を見ても、単なる現状分析（これが最も多い）にすぎないものからSF的なもので、まさに多様のものである。こういう状況にあるので、少なくとも現段階においては、未来学は科学の一領域として十分に確立しているとは言えないであろう。

未来学概念そのものがまだ明らかに定まっていない状態にあ

るにもかかわらず、それと歴史学との関係を論じようということは時期尚早であるという批判を免れえないであろう。結局、普通化された未来学と歴史学とを比較してそれらの関係を論じることのできる段階にはまだ達しておらず、当然の帰趣としてこの試みは、一研究者の頭の中の未来学と歴史学との比較であり、それらの関係の論究にすぎないという独断の幣に陥るような試みとなることであろう。このことは十分承知のうえであえてこの冒険を試みたのは、これが未来学の輪郭をより明確にするための一助となることを願ひ、今日の未来学についての新たな議論のきっかけとなることを願ったからにはかならない。

一、未来学と歴史学の共通点と相違点

1、共通点

(1) 歴史学も未来学も時間軸上に存在する。

歴史的思考ないし歴史研究は「時間」を媒体とした異質者との「対話」であるとされている。歴史事実の全体としての相互関連が一つの時点について、空間的に考えられるとともに、前後の時期ないし、時代との時間的な関連の問題として考えられなくてはならない。つまり、言うまでもないことだが、歴史学は時間科学であり、発展科学なのである。この点に関して、未来学も同じである。未来研究もまた、「時間」を媒体とした異質者との「対話」であるという一面をもっている。未来学はある場所にある事象が存在することになるであろうということだけでは完結せず、常に何時存在することになるのかということが問われるのである。両者とも、あらゆる事象が時間と空間の両面から捉えられなければならず、立体的な思考を強

を強く要求されている。

(2) 歴史認識にも、未来認識にもいわば一定の視座構造がある。それは現代の問題関心であり、それにもとづいて、過去を眺め、事実を選択し、整理しているのが歴史学である。そして現代の問題関心にもとづいて、過去・現代の総体からできるだけ客観的に未来のある時点において現実になるであろうと想定される事象を描き出そうとするのが未来学である。「あらゆる歴史は現代の歴史である」(クローチェ)と同様に「あらゆる未来史は現代の未来史である」と言える。

(3) 歴史学も未来学も事実による検証に直接さらされていない。

自然科学での実験に相当するものとして、歴史学には史料による実証の方法がある。しかし、その厳密性には一定の限界があり、史料としての文献だけから確実に導き出すことのできるものは断片的で、無意味な諸事実の集合にすぎず、ある問題関心にもとづいて、歴史像を構成しようとするれば、史料に選択や解釈が加えられなければならないが、その選択や解釈の可能性にはかなりの幅があって、さらに残存している史料は必要な歴史事実を認識するためには、あまりにも不十分であるから、その空白は推論、もしくは仮説によって埋められなくてはならない。未来学においては、その時間軸上に事実はいく存在しない。未来学の対象すべてが空白部分なのである。そこで未来学は直接検証にさらされない仮説によってのみ構成されることになる。直接検証にさらされていない点に関しては、未来学において一層絶望的なのである。間接的な検証の方法としてシミュレーションが考えられる程度である。従って、この点についての歴史学と未来学との共通性はあまり大きくはないが、一般に過

去の時間軸上に点在する事実が希薄になればなるほど両者の共通性は大きくなると言える。そこで歴史学の分野のなかでも特に考古学の分野などは、最も共通性の大きな分野の一つであると言える。

(4) 歴史学も未来学もきわめて総合的な学問である。

人間社会に生起する事象は、それが政治的、経済的あるいは文化的等々のいずれの領域に属するにしても、その社会全体としての構造のなかで、相互に密接に関連し合っているのであるから、歴史学においても、未来学においても、個々の事象だけを切り離して捉えていたのではその目的を十分に達成することはできない。他のあらゆる事象との関連において総合的に把握されなければならないのである。つまりある特定の事象にあまりにも囚われすぎていてはいけないのである。マルクスの「資本論」にあらわれている思想についても、それが生産関係に偏した思考から生まれたことを考えると、そこに大きな欠陥が潜んでいたと言わざるをえないであろう。

(5) 歴史学も未来学も人間研究の学問である。

歴史は、根本的には人間の歴史であり、歴史学は人間学の側面をもっている。未来を基本的に規定しているのも人間であり、未来学もまた根本的には人間研究の学問である。人間の進化、人間社会の進化、寿命、人口、意識変化等々、人間の問題が歴史学にも、未来学にも多面的に係わってきているのである。

ロ、相違点

(1) 未来学と歴史学の最もきわだった、最も分かりやすい相違点は、研究の目的が歴史学では過去にあり、未来学では未来にあるというところにある。そこで、歴史学では、過去の時間軸上の総体が研

究の対象になるのに対して、未来学では、過去の総体、現在の諸現象の総体、すでに設定されている未来の時間軸上の仮説の総体、これらすべてが研究の対象となるのである。歴史学と未来学との間に見られるさまざまな違いは、基本的にはこの違いに起因するとみてよいだろう。

(2) 歴史学においてはそれが対象とする時間軸上に事実が存在するが、未来学においてはそれが対象とする時間軸上に事実が皆無である。

従って、歴史学の内容は部分的ではあるが具体的であり、過去をできるだけよく知るための手掛かりとなる事実の発見、その正確な記述も歴史研究にとっての重要な一部となっている。一方、未来学の内容は純粹に思惟の所産であり、そこには歴史学に見られるような具体性は見当たらない。

それを設定した時点においては、厳密な検証の全く不可能な仮説のみで構成されているのが未来学である。その仮説の正否は、一定の時間の経過によって自ら判明するかのように一見思えるのであるが、必ずしもそうではない。たとえば、未来のある時点において、Aという事象が起るであろうという仮説が立てられたとして、それが非常に妥当な仮説として一般化したとしよう。そうすると、その仮説は、たちまちにして、それを歪曲させるようなさまざまな圧力を受けることになる。ある場合には仮説の現実化を速め、ある場合にはそれを遅らせ、ある場合にはそれを消滅させるような圧力を受けることになる。必ずしも、事象によって一様ではないが、いずれにしても、未来学においては、その仮説の設定時点における検証も、未来のある時点における仮説の正否の判定も非常に困難なのである。

だからといって、未来学が無意味だということではないし、このことが未来学が無意味だという考えに結びつくことも避けるべきである。もちろん、仮説の検証の方法の工夫等今後未来学をより科学的にするためになされなければならないことが山積していることは言わずもがなである。

(3) 想像力は、歴史学を志す者にとって必要な条件の一つであろう。特に歴史の空白部分を埋めるための精神活動、歴史における法則性の探究には豊かな想像力が要求されよう。しかし、想像力が豊かであることが、歴史学を志すにあつての絶対的な条件では必ずしもないと言えよう。これに対して未来学においてはより豊かな想像力が絶対的に要求されるのである。なぜならば、未来学においては、その時間軸上に思考の有力な手掛りとなる事実が存在しないだけでなく、過去、現在、未来に互る知識の総体を思考の素材として新しく思想を時間と空間の両面から立体的に構築しなければならぬからである。そのため、未来学では、歴史学に比べてはるかに豊かな想像力が絶対的に要求されることになるのである。

(4) 歴史学と未来学とは、それらの発達段階の違いが著しい。

歴史に関しては、すでに紀元前五世紀のギリシャに「歴史の父」ヘロドトスが現われ、物語風歴史の模範的作品を作っている。同じ頃、教訓的・実践的歴史の創始者ツキディデスも現われ、すばらしい作品を残している。この頃の人々の未来への関心はどうであったか。多分漠然としたものであり、その関心のあるものは宗教的な形をとって現われていたと思われる。

ヘロドトスからも分かるように、歴史上の記述には非常に古いものがあるが、ヘロドトスの物語風歴史に相当する未来学関係の記述

には、何があつて何時頃から書かれるようになったと言えるであろうか。これにあたる最初のものとしては、SF(サイエンス・フィクション)の創始者であるとされているフランスのジュール・ヴェルヌ(一八二八―一九〇五)によって書かれた一連の作品をあげるのが適當であると考えている。彼のSFとしての処女作は「気球に乗って五週間、発見の旅」で、これを雑誌に発表したのは一八六三年であつた。その後、彼は「地底旅行」(一八六四)、「地球から月まで」(一八六五)、「海底二万里」(一八七〇)など一連の作品を発表している。これらの一連の著のなかには、飛行機、潜水艦・移動路面・圧搾空気など、その後の科学技術の成果として実現したものが数多く記載されている。

しかし、SFをゆるぎない小説の一ジャンルとしたのは、イギリスのH・G・ウェルズ(一八六六―一九四六)であるとされている。彼は一八九五年、処女作「時辰儀」をもって突然、SFを世に問ひ、ついで、「火星の戦争」「月世界最初の人間」など、彼独特の作品を書いていく。その後、彼は科学の未来、科学の進歩に伴う社会生活の変遷、道徳の変化、人類の進化などの問題がSFの中心問題であると考え、文化批判、文明批判としてのSFの一面を開拓している。

ウェルズ以後、SFは一時沈滞期に入るが、その後のSFとしては、A・ハクスリーの「みごとな新世界」などが有名である。第二次世界大戦後は、科学技術の飛躍的な発展、日常生活の急速な機械化などによって、人類の未来に対する一般の関心がかきたてられ、アメリカ、ソ連、イギリスなど各国で盛んにSFが書かれるようになり、いまやSFはアメリカでは最も人気のある小説の一ジャンル

になっている。最近、日本でも若者を中心にSFへの関心は高まってきたおり、SF作家としては、星新一・小松左京などがよく知られている。

物語風歴史が書かれたのは、前述のとおり紀元前五世紀であった。これに対応させることができるであろう、未来学に関連する精神的所産としてのSF、リアリズムによって粹どりされたファンタジーとしてのSF、これが書かれるようになったのは十九世紀も後半に入ってからである。物語風歴史に比べると、このようにSFはまだ始まったばかりである。

歴史学の源泉は紀元前五世紀に遡ることができるとしても、そこに科学としての方法論が完成し、歴史学が近代科学として脱皮することができるようになったのは十九世紀に入ってからである。十九世紀のドイツの指導的歴史家ランケ（一七九五—一八八六）は近代歴史学の研究法の創始者の一人であり、彼は「近代歴史学のいわばコロンブス」、「近代歴史学の祖」と称せられている。他方、未来学に関してはどうかというと、前にも述べたように、SF、あるいは単なる従来の社会科学の段階からほとんど前進していない。いずれにしても、両者の発達段階には雲泥の差があり、このことが、両者の間にみられ著しい相違の一つとなっている。

二、未来学の基礎学問としての歴史学

未来学においては、前述のように時間軸上に事実は存在しない。そこで、事実に関しては、無限の過去および現在の事実を未来研究の対象にすることになる。この過去の無限の事実がある基準に従ってとりあげ配列してくれるのが歴史家であり、確実な事実にもとづ

いて、諸事象間の因果関係や歴史の発展の法則などを明らかにしようとしているのが歴史家である。未来研究に不可欠な過去の総体のすべてについてとはいかなくても、その一部分について未来研究に利用しやすい形に歴史家は加工してくれているのである。この意味において、歴史学は未来学の基礎分野と言えるのである。

特に、近代歴史学のめざす方向は、歴史学を未来学にとってのますます魅力的な基礎分野にしつつあると言える。あえて言うならば、「歴史学の発展の過程は、その未来学への接近の過程である」とも言えるのである。一八世紀のヨーロッパ啓蒙思想期におけるコンドルセや十九世紀のマルクスなどによる「進歩史観」は、過去を通して「現代を知るためのもの」というより、過去を通して特定の現代思想を知らしめる、納得させるためのもの」という評価もなされているが、それはともかくとして、歴史学と未来学との接点にある史観であり、歴史学の一つの新しい波紋を投げかけた史観であるとすることができよう。なかでも、マルクスは、人間の営む経済的諸関係を中心とした歴史的研究から、来たるべき社会を共産主義社会であると大胆に規定している。これは、歴史的研究によって生まれた一つの未来社会についての仮説である。しかし、この仮説の設定過程には、研究の対象が経済的諸関係に偏重しすぎたため、歴史学が非常に総合的な学問であり、未来学はさらに総合的な学問であることを考え合わせると、重大な誤謬があったとみざるをえない。彼のこの仮説は、政治の世界においてはいまもまだ脈々と生き続けている。しかし、学問的にはいまではすっかり色あせてしまったと言えよう。たんなる歴史的所産にすぎなくなっているのである。

このように歴史学は、未来学にとって最も重要な基礎的学問分野

である。しかし、未来学が歴史学の延長上にあるというのでもないし、未来学が歴史学の応用によって、その目的をあますことなく完遂することができるというのでもない。K・ボバーのいうように、一匹の毛虫が蛹に変わる過程をどれほど注意深く観察してみたところで、それが蝶に変化するのを予測する助けにはならないのである。ここに、歴史学の未来学研究のための基礎的学問としての限界があると言えよう。未来学では、学問分野を問わず、学問分野を越えて過去、現在、未来の総体が研究の対象になるのである。事実、法則仮説のすべてが研究の対象になるのである。単に歴史学を活用するだけでは未来学は成立しえないのである。

おわりに

今日の人間をとり囲む諸条件の変化の速さには目を見張るものがある。人間を含めて、生物にとって環境の急変はその生存にとって好ましいものではない。環境の急変に適応しきれないときは、その生物は絶滅の運命をたどることになる。

人類の危機、人類の滅亡が折にふれて云々されている今日、これを回避する道はあるのだろうか。多分、これを回避するために人間が持ち合わせている最良の武器は未来予測能力であろう。これは、人間にのみに賦与された、人間特有の能力である。人間の予測能力を越えてさらに変化が急速であった場合、真に人類の危機がおとずれることになるであろう。この意味においても、よりリアリスティックで、未来志向のSFを含めて、今後の未来学の発展を願ひ、その基礎学問である歴史学の一層の発展もまた願うものである。